

インタビュー

知る喜び 学ぶ楽しさ

京都産業大学教授
益川敏英

学ぶことは本来 楽しいこと

鈴木 2008年、益川先生は小林誠先生（高エネルギー加速器研究機構特別栄誉教授）とともにノーベル物理学賞を受賞されました。

私は物理についてまったく知識がなく、先生が専門とされている素粒子物理学について大学の工学部で学んだ息子からレクチャーしてもらいました。息子は一生懸命「小林・益川理論」を解説してくれたのですが、私はさっぱり分からなくて：（笑）。息子が、「お母さんみたいな人が分かるような話ではないよ（笑）。益川先生がノーベル賞を受賞されるまで、どれほど努力をされたことか：。僕はそのことに感動する。先生がなぜ努力を続けることができたのか、ぜひ知りたい」と聞いて尻込みしましたが、「私

が会いたいくらい」という娘に背中を押されて来ましたが、勉強にしても仕事にしても、努力を続けることは時として苦しみを伴いますよね。先生が学問を学び、長年研究を続けてこられた原動力は何だったのでしょうか。

益川 「勉強」というと「刻苦^{くく}勉強^{べんれい}」といって、心身を苦しめるほど努力を重ねて、怠けると鞭で打たれるようなイメージがあるでしょう。

そうした「勉強」という言葉が、僕はあまり好きではありません。「勉」という漢字の「免」という部分は、もともと女性が子どもを産む時の姿勢を表しているそうです。だから「勉強」というと、「産みの苦しみを強いる」とも読めるんですね。

英語でいう勉強「スタディ」の語源は、スツードオというラテン語で「知る楽しみ」という意味なんです。本来、知ること



インタビュー 鈴木拓美

尼崎医療生協（兵庫県）
職員

ますかわ・としひで

1940年、愛知県生まれ。素粒子論を専門とする物理学者。名古屋大学理学部卒業後、同大学大学院理学研究科博士課程修了、理学博士。名古屋大学理学部助手、京都大学理学部助手を経て、東京大学原子核研究所助教授、京都大学基礎物理学研究所教授、同所長、京都産業大学理学部教授、同大学研究機構長などを歴任。2008年、ノーベル物理学賞受賞。現在は、京都産業大学益川塾教授・塾頭、名古屋大学特別教授・素粒子宇宙起源研究機構長、京都大学名誉教授、九条科学者の会呼びかけ人を務める。主な著書に「15歳の寺子屋『フラフラ』のすすめ」（講談社）、「僕がノーベル賞をとった本当の理由」（フォーラム・A）、「現代の物質感とアインシュタインの夢」（岩波書店）などがある。

は楽しいことです。それが試験をやって、点数をつけられて、お前はダメだ、これくらいの学校にしか行かないぞ、ということは何度もいわれていると、勉強なんて面白いわけがない。

鈴木 そうですね。ゲームをやるのは楽しいけれど、それが競技になると苦しくなるようなものですね。

益川 江戸時代から今日まで、なぜなぜやクイズというものがあるんですかね。江戸時代の落語「東の旅」は、2人

がなぞかけをしながらお伊勢詣での旅をする斬です。また、最近でもテレビでクイズ番組は多いでしょ。本来、子どもたちはみんな知ることが好きなんです。子どもだけでなく、人間には知識欲があつて、知ることが楽しくて、思わず謎を解きたくなるものです。科学というのは、そうした不思議なこと・分からないことへの答えを見つけていく営みなんです。

鈴木 子どもたちは、本質的に科学が嫌いではないのですね。

益川 そうです。勉強すること、知識を吸収するということなどは楽しいことなんだと味あわせてあげるのが本来の「教育」だと思います。そこから先は、子どもが興味を持ったものを伸ばしてあげればいいわけです。

一生懸命に 励めるものが必ずある

鈴木 今はあまりにも試験が多い。大学入試などは非

常に複雑な試験制度になっ
ていますよね。知ること
を楽しむ以前に、試験のため
に日々エネルギーが費やさ
れている状態です。

益川 子どもの到達を測定
するために、大学入学試験
をそんなに複雑にしなけれ
ばならないのかというと、
決してそんなことはない
と思います。僕は試験をもっ
とシンプルにすべきだとい
いたい。やさしくしろといっ

を注ぐべきではないか、と
いうことですね。

ているのではないな
いですよ。もっ
とシンプルに。
そして、先生に
も、子どもたち
にも余裕を与
えることが大
切です。

鈴木 試験にか
かわる労力を
減らし、その分
知ることを楽し
めるような教
育の充実に力

たちは自分から勉強します。
刻苦勉強させるための鞭な
どもいりません。

鈴木 先生は、学ぶことを
ずっと楽しんでこられた。
でも時には、苦しい努力も
されたのでしょうか。

益川 苦しい努力をしなけ
ればならないようなら止め
なさい、と僕は学生によく
いつているんです。そんな
ものは本物ではない。自分
が努力しなくても、一生懸
命に励んでいられる楽しい
ものが必ずある。そういつ
たものに出会うまで探しな
さい！といたいですね。

学ぶことは 自由を獲得する プロセス

鈴木 先生の著書に、「学ぶ
ということとは自由を獲得す
るためのプロセスである」
という言葉があります。と
ても素敵だなと思いました。

益川 そうすれば、子ども



益川 その言葉は、もとは200年ほど前の哲学者ヘーゲルがいった「自由とは必然性の洞察である」という言葉を僕流に解説したものです。ヘーゲルは自由という問題を哲学的に深く考察していました。ヘーゲルの哲学は非常に難解で「必然性の洞察」といつても、よく分らないですよ。

そこで、こう考えてみたわけです。例えば、ここにAとBの2つのレバーがあつて、一方を引くと毒ガスが、もう一方を引くと100万円が出てくるとします。どちらのレバーが毒ガスなのか、または100万円なのか分らないまま「さあ、レバーを引いてください。どちらを選ぶかは、あなたの自由です」といわれたとします。それは本当の「自由」といえるのでしょうか。

鈴木 それは偶然に頼っているだけですよ。

益川 ヘーゲルがいうのは、偶然性に身を任せるのではなく、必然性を知った上でレバーを引くのが自由。つまり「Aのレバーを引くと毒ガスが出る」「Bのレバーを引くと100万円が出る」という法則を分かった上で、どちらかを選ぶ、それが自由であるということです。

科学というのは、この必然性を知るための学問であり、世界のしくみや法則を追究し、説明する営みです。それは人間が自由を獲得し、繁栄してきたプロセスそのものです。

「自己責任」ですむほど人生は単純ではない

益川 勉強というのは自分が熱心に打ち込めば、それだけのものが自分に返ってきます。だからこそ楽しいものだと思うんです。ところが対社会となると、自分の努力だけではどうにも解

すよね。

鈴木 そうなんです。特に最近は一度レールから外れるとやり直しができない。

益川 就職する時は新卒でないとダメ。何かの拍子に会社が倒産したり、会社を辞めるといふことになる、再就職は困難を極めます。

鈴木 貧困や失業は自己責任であるとか、努力が足りないからだといわれることがあります。しかし、選択ができない状況に追い込まれている人がたくさんいる中、果たしてそうなのかなと思います。

益川 人によって生きている環境はさまざま、スタートラインも違います。運とタイミングというものもあるでしょう。努力に努力を重ねてもいい結果が出ないということもあります。結果が出ない人に向かって「お

まえの努力が足りないのだ」といえるほど、人生は単純なものではないと思います。

鈴木 どんなに努力してもうまくいかない、いい結果が出ない。それでもなお、その道を歩まざるを得ない人はたくさんいるわけですからね。

戦争体験と平和活動

鈴木 益川先生は05年に憲法九条科学者の会を結成され、呼びかけ人としても参加されています。平和活動に積極的にとりくまれている



先生の戦争と平和への想いを
お聞かせいただけますか。

益川 太平洋戦争が終わる
間際、名古屋が空襲にあつ
て、我が家に焼夷弾が落ち
たんです。その焼夷弾は不
発だったので家は残ったの
ですが、辺りは焼け野原に
なりました。もし不発でな
かったら、多分僕は死んで
いました。当時は4〜5歳
くらいですから、幼少の記
憶がないわけです。でも、
家財道具といっしょにリヤ
カーに乗せられて、両親と逃
げる場面がスチール写真のよ
うに記憶に残っています。

鈴木 子どもや孫たちに、
決してそんな経験だけはさ
せたくないですね。

益川 本当にそうです。僕
が中・高校生の頃、ベトナム
がフランスから独立する
ためのインドシナ戦争の新
聞記事を日々見ていて、戦
争は人間のすることではな

いと思えました。戦争とい
う行為は実に野蛮なものだ
という印象を強く受けまし
たね。その後、独立戦争終
結と同時に、ベトナムは南
北に分断。60年には南ベト
ナム解放民族戦線が結成さ
れ、やがてベトナム戦争に
…。さらに悲惨な状況をリ
アルタイムで見っていました。

鈴木 60年代の安保闘争の
時代、益川先生は学生運動
に参加したり、市民集会に
講師として派遣されたこと
もあったそうですね。

益川 佐世保に原子力潜水
艦が入港するということで、
反対運動が起きました。そ
こで市民から原子力潜水艦

とはどのようなものか知り
たいと講演依頼がくるわけ
です。当時、僕は名古屋大
学の大学院生で、原子力の
知識がある先生に、原子力
潜水艦とはどのようなもの
で、航海するとどれくらい
放射能が溜まるのか、それが

漏れたらどのようなことに
なるのか、ということなど
をレクチャーしていただき
て、原子力に関する資料を
持って市民が集まる勉強会
によく講師として行ってい
ました。

また、恩師の坂田昌一先
生は、「素粒子論の研究も平
和運動も同じレベルで大事
だ」と語り、反核・平和運
動に熱心にとりくんできて
した。僕たち院生も、全国
の科学者に反核を訴える声
明文をガリ版刷りしたり、
手紙を出すお手伝いをして
いましたね。

**戦争は
きつとなくなる！**

鈴木 先生は著書「益川博
士のつばやきカフェ」で「戦
争を引き起こす原因となっ
ている世の中の仕組みや人
間の心理から目を背けずに
問題解決に力を注ぐ。そし
て、戦争が愚かであること、
戦争はイヤだという思いを

一人ひとりが表現し続ける。
長い目で見れば人類は間違
いなく前向きにすすんでい
る。あと200年で地球上
から戦争はなくなる」とおっ
しゃっていますね。

益川 はい、地球上から戦
争がなくなる日が必ず来る
と僕は確信しています。

鈴木 戦争がなくなる、そ
の日が来るまで、戦争はイ
ヤと遠慮なくいい続けるこ
とが大事なんですね。私た
ち医療福祉生協は、これか
ら積極的に平和活動にと
りくんできてほしいと思いま
す。今日はありがとうございます。
(編集部)

益川敏英さんの
サイン入り著書を
プレゼント!



3名様

『益川博士の
つばやきカフェ』
三省堂

※本誌綴じ込みハガキにてご応募
ください。

インタビュー
益川敏英